

連続フォーラム 「生活拠点としての『地方』 –女性の「働く」を応援する 大学・企業・地方自治体の役割」 開催報告書

【独自テーマ】 キャリアアップと転職

【講師】

(1) 田中 里枝氏（京都大学大学院医学研究科 特定研究員・理化学研究所放射光科学総合研究センター 客員研究員）

(2) 二村 真祐美氏（株式会社ボゾリサーチセンターつくば研究所 創薬研究部）

【日時】 平成 29 年 10 月 4 日（水） 16:00～18:00

【場所】 岐阜薬科大学本部 大学院講義室

【参加者数】 42 人（うち女性研究者 17 人）

講師両名はともに岐阜薬科大学の卒業生であり、卒業後は勤務先を変えたり、結婚や出産というライフイベントを経験しながらも、学位を取得し、現在まで研究者として勤めている。

(1) 『仕事を続けて得られたセレンディピティー～企業からアカデミアの道～』

大学卒業後に民間企業に就職してから、財団法人研究所、JST、国立大学法人の研究所、国の研究機関へと、企業もアカデミアも経験してきた。

最初の就職先では、有機化学の研究を続けながら博士号を取得した。その後、関東地方の研究以外の部署への転勤が命じられ、まず転機になったという。転職をするか、結婚して仕事を辞めようか悩んでいたところ、先輩からの「ブランクをあげずに、ポジションを」確保すべきという言葉にしたがって、転職して結婚をした。その後、日本薬学会創薬科学賞を受賞している。



その後も任期付の職を得て、期限が迫るところになると、先輩や上司に「ブランクをあげずに、ポジションを」と進言されてきた。離職を思い悩むときもあったが、途切れることなく仕事を続けてきた。

今のモットーは「プロフェッショナルであること」「仕事を続ける」とであると話す。

仕事を続けるうちに、自分が仕事のどこに大きな喜びを感じるのかがよく分かってきたという。そして、若手研究者や学生に対して、「若いうちにいろいろ身につけるよう努力をしたことは覚えているものである。今を大事に何事もコツコツ取り組むうちに自分に自信を持てるようになる。」とエールが送られた。

また、社会貢献活動としてボランティア活動を行っていると紹介された。それも自分に向いていること、仕事に活力を得られるようなことを選んで続けていくよう勧められた。

最後に「仕事は続けよう」「プロフェッショナルを目指そう」「経済的な基盤を持とう」とメッセージを発信していただけた。

(2) 『窮すれば則ち変じ、変ずれば則ち通ず ～研究を続けるためには～』



中学生の時、マリー・キュリーに憧れて、将来は研究者になりたいと思った。大学でも自ら積極的に学び、京都大学大学院を修了後、製薬会社に研究者として就職した。結婚後に社内異動の辞令がおり、最初の試練を味わった。しかし自分の信念は変わらないと受け入れて乗り越えた。

その間、出産、学位取得と進んで行ったが、研究所の閉鎖が決まり、再就職先を探す必要に迫られるという第2の試練を味わうこととなった。タイミングよく、別の企業が同じ地域で創薬研究所が立ち上げられることを知り、その研究所に就職できた。会社の業績も順調で今に至る。

「女性研究者が研究をつづける」ための方策として、1. 夢ややりがい、働く意志を強くもつ 2. 自分の夢はあきらめない 3. よき理解者を得る 4. 必要とされる人になる 5. 臨機応変に順応する、の5つを挙げて、それぞれ具体的にお話しいただいた。

自分の軸、信念は変えない。自分の価値観にとらわれず柔軟に対応し最善を尽くす、そうすることで新しい道が開ける、と訴えられた。

<総括>

転職してキャリアアップをすることは容易ではないが、講師自身が経験してきた、女性研究者ならではの働き続けるための話を聞くことができた。会終了後には、研究を継続して取り組むことの重要性も再認識できたという意見も聞くことができた。若手研究者や学生にとっては自分の将来を考えるよいきっかけとなったといえるだろう。



このフォーラムでは女性研究者が参加者全体の40%、女子学生が26%を占めた。辞めずに続けていくこと、自分の軸・信念を持ちその時々で最善を尽くすこと、経済的な基盤を持つこと、というメッセージが送られ、それぞれ自分の身に置き換えて聞くことができた。有意義なフォーラム開催であったと思われる。